

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎主 題：「恵みの御座に近づきなさい」
—困難を乗り越える奥義—

テキスト：ヘブル人への手紙4章14～16節

はじめに

- ・人生には「意外なこと」（サプライズ）があります。意外なことには背景がありません。今年の夏でしたが、私が米国宣教旅行に出かける直前、北浜チャーチの皆さんがサプライズ（意外なこと）、私たちの「宣教40周年記念」を祝ってくださいました。これは私たち夫婦には、一切予知されていませんでした。
- ・聖日礼拝後、私たちは部屋で待機し、交わりの部屋に上がってこないように、指示されました。時間がきて部屋に入ると、お部屋は私たちの「宣教40周年記念」を祝う準備がされていました。⇒“サプライズ”でした。
- ・北浜チャーチの兄弟姉妹から、お祝いの言葉をいただき、次に教会外の方々から、DVDを通して祝辞をいただきました。国内のオアシス・チャーチ、チャペルこひつじ、海外ドイツ、オーストラリアなどからもメッセージをいただきました。3人の息子たち家族（3人の嫁、6人の孫）からもお祝いのメッセージをもらい、感動しました。本当に感謝でした。
- ・一口に40周年と言っても、その間にはいろんなことがありました。ドイツ Duesseldorf での召命、献身、共産圏伝道、「ミッション・宣教の声」設立、国際教会 SIBC, そしてビジネスマン伝道から始まったKIBC等……。万感胸に迫るものがありました。神は小さな者を、御国の働きのために用いてくださり、ただ感謝でした。すべて、主の恵みとあわれみの下でした。

1. 皆さん。私たちが生きている毎日の生活には、「意外なこと」（サプライズ）があります。サプライズの中でも、苦しいこと、悲しいこともあります。なんでこんなことが起こらなければならないかと、悩むことがあります。とくに理由もなく人が殺されたり、神はなぜこのようなことを許しておられるかと問われると、何と答えたらよいか分からなくなってしまいます。
- ・クリスチャンは、何でも知っているわけではありません。しかしあまりに理不尽なことが起こると、私たちは戸惑うことがあります。では、もうお手上げて、どうしていいか分からなくなってしまうのかと言うと、そうではありません。「私たちのためには、あらゆることを経験し、天に昇られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられる」からです。ですから、失望落胆する必要はありません。神のみことばは、私たちが信仰の告白を堅く持つことを勧めています。
2. ところで、ユダヤ教の中心には「3本の柱」があります。ヘブル人への著者はユダヤ教の核心である「三つの柱」より、イエス・キリストはさらに優れたお方であることを語ってきました。三つの柱とは、①天使、②モーセ、③「アロンとレビ的祭儀の体系」のことです。神の御子イエスは、①天使より、また②モーセより、はるかに優れた方であることはすでに学びました。
- ・著者は「三つの柱」の中で、最後の「アロンとレビ的体系」に最も多くのスペースを割いて解説しています（4：14～10：18）。と言うのは、ユダヤ教はこの「ア

ロンとレビ的体系」を土台として発展してきた宗教であるからです。著者は次の様々な点で、イエスはアロンより優れた方であることを説明しています。

- 今日のテキストは、イエスは「アロンとレビ的祭儀の体系」より優れていることを証明しています。

大切なポイント

1. 真の大祭司イエス

1) 祭司職

4:14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

- 聖書を開きますと、モーセの兄アロンが最初の大祭司であったとあります。そしてアロンの子孫のみが代々この職を継ぎました。祭司とはイスラエルの民を代表して、神の前に出ること
ができた特別な人でした。
- 大祭司については後で詳しくでてきますが、ここでは旧約聖書から見てみましょう。

出エジプト 25章

25:8 彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。

エジプトを出たイスラエルの民は、荒野で神の幕屋を造りました。それは神殿ができる前のことでした。幕屋とは神が住まわれる聖所のこと、イスラエルの民はそこで神へ礼拝をささげるよう備えられました。一番はじめの祭司アロンの最も大切な職務は、聖である神の前に出るため、民と自分の罪の赦しのために儀式をとり行うことでした。それは「贖罪日」に行われ、とくに大事な儀式でした。レビ記には次のように書かれています。

16:33 彼は至聖所の贖いをする。また会見の天幕と祭壇の贖いをしなければならない。また彼は祭司たちと集会のすべての人々の贖いをしなければならない。

16:34 以上のことは、あなたがたに永遠のおきてとなる。これは年に一度、イスラエル人のすべての罪から彼らを贖うためである。」

- 祭司の大切な働きは、イスラエルと自分の罪のために、犠牲の動物を携えて、神に赦しを願う儀式を行うことでした。このようにして、祭司職はアロンから始まりました。そしてその幕屋から、後のエルサレム神殿の時代に至るまで、代々と受け継がれてきました（神のイスラエルの民へのご計画は、幕屋、神殿、教会へつながる）。つまりイスラエルの民は、幕屋と神殿の時代、祭司を通して神の前に出ていました。それが旧約聖書時代の祭司でした（エルサレム神殿はAD 70年、ローマ軍によって破壊された）。
- 聖書を読んでいきますと理解できることは、幕屋、神殿で仕えた祭司は、やがて来られる本物の大祭司であるイエス・キリストの「ひな型」であったことです。つまり、イエス・キリストこそ真の大祭司です。イエスはアロンと違い、「もろもろの天」を通られた偉大な大祭司です。イエスはアロンのように、地上の幕屋で民を支さえるのではありません。今は天の幕屋で、私たちを支えてくださっているのです。
- では、イエスとはどんなお方でしょうか。

2) もろもろの天を通られた大祭司イエス

4:14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

か。

- ・「**もろもろの天**」とは、どういう意味でしょうか。当時のユダヤ人たちは、天というものは何層にもなっていると考えていたと言われます。ある人は3層、あるいは他の人は7層であると考えていたようです。
- ・天というものが、そういう何層にもなっていたという考え方は、今日の私たちからすれば、幼稚な考え方のように思われるかもしれませんが、近代の自然科学が発達する以前は、このような考え方、表現の仕方がありました。それは幼稚であると、片付けられるものではありませんでした。現代の私たちは、物事を自然界、超自然界という分け方で考えるものです。パウロはその超自然界のことを、「**もろもろの天**」と呼びました。
- ・皆さん。聖書で「天」という言葉が使われる時、いろんな意味で使われています。
 - ① **「初めに、神が天と地を創造した。」 創世記 1:1**
この場合の「天」とは、「地球以外の一切のもの」を意味します。
 - ② **「天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。」 マタイ 6:9**
この場合の「天」は、この世と対比して使われています。天は神のみ座に対して、この世は悪魔が支配しているところという意味になります。
 - ③ **「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」 エペソ 6:12**
この場合は、①、②とは違います。つまり超自然界という意味です。
- ・この③の意味で使われているのが、4章14節でいう「天」です。すなわち、ここで著者が言おうとしていることは、イエスは「あらゆることを経験」されたということです。それは「**すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。**」(4:15b)と同じことです。
- ・この書簡はユダヤ人で、イエスをキリストと信じた読者宛てに書かれたものです。したがって、彼らの祭司とか、天とか、贖いという用語はなじみ深く、分りやすいものでした。著者は、イエス・キリストこそ真の大祭司であると説きました。そしてさらに、イエスはどんなお方かについて書きました。

2. 人となられた神の御子イエス

4:15 我們の大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

1) 誘惑(試み)に遭われたイエス

- ・皆さん。イエスが私たちを助けてくださる、あわれみ深い大祭司であられるのは、私たちと同じように試み(誘惑)を受けられたからです。時々、私たちは人に言えないほどの大きな苦しみを経験することがあります。その時、慰めや励ましの言葉をかけてくれる人がいることは嬉しいことです。
- ・しかし時には、それが軽っぽく聞こえる時もあります。「私の今の苦しみは誰にも分からない」と思うことがあります。時と場合によっては、悲しみが余りに深いため、「私の苦しみはあなたになんか分かるはずはない」、「あなたのような幸福な人に、分るなんて言って欲しくない」、という気持ちになることがあります。しかし、同じ経験をした人の一言は、どんなに深い慰めになることでしょうか。
- ・イエス・キリストは、「**すべての点で、私たちと同じように、試みに会われた**」

(4:15b) 方です。私たち人間は、自分が経験したことと、他の人が経験したこととは、必ずしも同じではありません。自分が経験しなかったことを経験した人もいますし、他の人の経験しなかったことを自分が経験している場合もあります。

- しかしイエスは、私たちと違います。すべてのことを経験されました。それが「**もろもろの天を通られた**」ということです。私たちが誘惑を受ける場合、お金の誘惑かもしれませんが、あるいは性的な誘惑かもしれませんが、あるいは自分の名声についての誘惑かもしれませんが、あるいは、権力・権威についての誘惑かもしれませんが。ひとりひとり、皆違うでしょう。その内二つ、三つの誘惑を受けることはあっても、すべての誘惑を受けるとは限りません。
- しかしイエス・キリストは、私たちが受けるあらゆる誘惑を受けられました。それが「**私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではない**」(4:15a) という証拠です。
- イエスが人間としてこの世に来られたことは、人間としての弱さを持っていたことを意味します。聖書は「**だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言っては いけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。**」(ヤコブ1:13)、と語っています。イエスが誘惑されたことは、確かに人間性をとられたことを意味します。
- 皆さん。誘惑を受けるとか、誘惑を感じることは罪ではありません。私たちが誘惑を受けます。しかし誘惑に負ける時、罪を犯すこととなります。ですから、誘惑に対してどう対処するかが鍵であります。

2) 誘惑(試み)に勝利する奥義

では、私たちはどうすればよいのでしょうか？ **へブル人への手紙**

12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

- イエスは公生涯のはじめ、荒野でサタンから3度にわたる誘惑を受けました。また「**神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。**」(マタイ27:40)、と試みを受けられました。その大きな試みの時、イエスは負けることはありませんでした。
- イエスは人としての姿をとり、私たちと同じように地上生活を歩まれました。そして、私たちと同じように、あらゆる点で試みに会われましたが、一度も罪を犯されませんでした。そこがアロンと異なります。イエス・キリストは真の大祭司です。
- 皆さん。誘惑に負けてしまう場合は、ほとんど力はいりません。その誘惑に流されるだけであるからです。しかし、誘惑に打ち勝つには大きな力が必要です。しかし力があれば出来るというものでもありません。
- それは血みどろの戦いの中で勝ち取られるものです。イエスは私たちが想像できない悪魔の攻撃に対し、厳しい戦いがありました。悪魔はイエスに集中攻撃を加えました。熾烈な戦いの中で、イエスは勝利を得られたのです。そのようなお方を、私たちは救い主、また助け主として与えられていることは、どんなに感謝してもすぎることはありません。
- **4:16** ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。
- 著者は今日のテキストを、このみことばで締めくくりました。神のあわれみを受け、神の恵みを受けるために、大胆に恵みの御座に近づくと、どういうことでしょうか。

⇒ それは人生の試練や戦いの中でも、喜びの確信を持ち歩むことです。

- ・天の御国の御座には、大祭司であるイエスがおられ、私たちのために「とりなし」をしてくださっています。ですから、喜び、確信、自由、勇気があります。それがイエス・キリストにある信仰生活です。
- ・私たちの人生には戦いがあります。意外なこと、サプライズがあります。しかし、前には希望の光があるのです。神は聖書を通して、その幸いな真の光について教えてくれています。ですから“Good News”（よい知らせ）です。
- ・モーセと一緒にエジプトを出た民は、不信仰のためシナイの荒野でほとんど死んでしまいました。彼らは約束の地へ入れませんでした。彼らは神のことばに、従順ではなかったからです。著者はこの事実を、同胞へブル人読者へ思い起こさせています。どんなに「意外なこと」（苦しいこと、つらい事）があっても、大祭司であるイエス・キリストがいてくださるからです。イエスをしっかりと見上げて歩むこと、それが私たちに求められています。
- ・いかがでしょうか？ 私たちの信仰は、「大胆なもの」（喜びの確信を持って、自由と勇気を持って）になっているのでしょうか。喜び、確信、自由、勇気をいただいているのでしょうか。そうであれば幸いです。しかしもしそうでなければ、どこに問題があるのでしょうか・・・？ 自問自答してみきょうではありませんか。
- ・神は私たちが、大胆に恵みの御座に近づくことを喜んでくださいます。感謝。

ま と め

主 題：「恵みの御座に近づきなさい」
 一 困難を乗り越える奥義一

- ・私たちの人生には、確か「意外なこと」（試練や誘惑）があります。どんな困難な道であろうと、天には大祭司であるイエス・キリストがおられます。そしてイエスは、私たちのために「とりなし」をしてくださっています。祭司アロンではなく、真の大祭司イエス・キリストがおられます。動物の捧げものではなく、ご自身の身体を生ける捧げものとして十字架の祭壇に捧げられたお方です。罪のないお方でしたから、動物の捧げものは不要でした。ただ、私たち民のために、イエス・キリストはご自身を祭壇にお捧げくださいました。これ以上の恵みはありません。
- ・今日、私たちは次の大切な二つの点を学びました。
 1. 信仰の告白を堅くもつこと
 4:14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。
 2. 大胆に恵みの御座に近づくこと
 4:16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

* God bless you!